

## 日本における聞一多研究について

野村英登

研究史を理解することは研究者にとって必須の作業ではあるものの、その作業を文章化することは若い世代の研究者には特にはばかられるものである。もちろん、自分自身が書く論文それ自体についてであれば、関係する先行研究だけを対象として限定した議論を展開すればよく、一応は問題なく実践できるだろう<sup>(1)</sup>。しかし研究史となると、個人の研究経験ではどういカバーできないような範囲を議論しなくてはならなくなる。また、今ここにいる自分に直結する現代史に他ならないので、当然のごとく公表されている論文以外の多くの語られてない史料を相手にしなければいけない。さもないと研究の評価を個人の評価と混同され、思わぬところから批判されることになるかもしれない。できるかぎりそうした政治的配慮をしなくてすむような方法としては、引用・被引用情報を付加された論文目録データベースを利用して計量的な判断を基礎として議論を展開することが一つの解として考えられる。ただもちろん日本の中国学に関しては、現在そうしたデータベースはない<sup>(2)</sup>。

ところが幸いなことに、ちょうど世紀の分かれ目という世間的な風潮を受けてか、ここ一〇年の間に二〇世紀学術の回顧と再検討が様々な分野で行われ、結果として研究史の検討も行われた。日本の中国研究においても、戦後五〇

年という区切りもあり、主要な学会においてシンポジウムが開かれ、研究史がまとめられてきている。中国現代文学に関しては、以下の日本の主要な学会で研究史の総括が企画された。(1) 日本中国学会では興膳宏氏による「中国研究この五十年 文学」(『日本中国学会五十年史』所収、汲古書院、一九九八年)に、(2) 財団法人東方学会では丸山昇氏による「Contemporary Literature in Japan」(*Acta Asiatica* vol. 72 1997. 「日本における中国現代文学」『桜美林大学中国文学論叢』二三、一九九八年)に、(3) 日本現代中国学会では阪口直樹氏による「現代中国文学研究の五〇年」(『現代中国』七五、二〇〇一年初出、『中国現代文学の系譜——革命と通俗をめぐる』(東方書店、2004年)所収)に、それぞれ成果としてまとめられている。

こうした成果のうち、本論では阪口氏の論考を基礎として、日本における聞一多研究の動向を俯瞰することを試みたい。阪口氏の方法は、戦後五〇年を大きく三つの時代に分けて、それぞれの時期に公刊された論文を論文目録からピックアップして作家別・ジャンル別にまとめることで、統計的に傾向を読みとろうとするものであり、論者の主観が比較的介在しにくいだろう。したがって、同様の方法によれば、報告者のような第五世代<sup>(3)</sup>の初学者であっても、精度は下がるであろうが、比較的信頼しうるデータを示しうるだろう。また中国現代文学の研究動向を背景とすることができると、専論のみを挙げる方法に比べれば、より奥行きのある視点が提示できるのではないかと考える次第である。

そこで本論では、阪口氏にならった、(一) 戦後三〇年の研究動向(一九四五～一九七七)、(二) 戦後一〇年に見る研究動向(一九七七～一九八六)、(三) 九〇年代の研究動向(一九八九～一九九五)の三つの時代に加えて、(四) 最新の研究動向(一九九六～二〇〇四)を設定して、日本における聞一多研究の概況を論じることにする。なお、聞一多研究のサーベイにあたっては、牧角悦子・横打理奈「聞一多研究資料総合目録(日本篇)」(日本聞一多学会報『神

話と詩』一、二〇〇二年）及び同補遺（日本聞一多学会報『神話と詩』二、二〇〇三年）に基づいた。なお同目録は大きく「評伝」「新詩」「古典研究」「その他」の分野に論文を分類しており、研究動向の変遷を概観しやすい構成になっている。本稿もこの分類を踏襲する。

当然のことながら、本来的には量と質では質が優先される。一人の研究者、一本の論文の登場によって大きくパラダイムが変わるようなことはあるだろう。<sup>(4)</sup>そこで本論では、異論の余地のないと思われる重要な研究については個別に言及することとした。その際には、上述の論文目録を編まれた牧角氏より教示を受けた。ここに謝意を表したい。なお言うまでもないことだが、本論における、事実の誤認や不適切な評価については、すべて筆者に責がある。

## 一、戦後三〇年の研究動向（一九四五～一九七七）

さて、まず最初に戦後から文革が終結するまでの二七年間の研究動向を取り上げることにする。作家別の論文数ベステンで見ると、上位から順に、(一) 魯迅六四四本、(二) 郭沫若七八本、(三) 茅盾七六本、(四) 老舍七二本、(五) 丁玲六七本、(六) 趙樹理五六本、(七) 胡適三四本、(八) 郁達夫三一本、(九) 巴金三〇本、(一〇) 李大釗二七本となっており、魯迅が圧倒的な本数を誇っていることは明らかである。<sup>(5)</sup>では聞一多に関する論文数はというと、全部で一二本が計上され、ぎりぎりベスト二〇に入るかどうかといったところである。しかしこの時代の聞一多の研究は、後に大きな影響を与えることとなった。

研究の内訳をみると、一二本中、評伝五本、新詩四本、古典研究二本、その他一本となっている。このうちもっとも重要な研究が早い時期に行われた評伝研究である。うちもっとも有名なのが一九六六年に発表された目加田誠氏の

「聞一多評伝」<sup>(6)</sup>であろう。目加田氏は『詩経』研究の権威であり、『詩経』の注釈を記すにあたって、ある部分については聞一多の論文を参考にしていた。<sup>(7)</sup> また小野忍氏や小川環樹氏など一流の学者も評伝を書いている。更に、古代研究の大家である白川静氏<sup>(8)</sup>などもその研究に聞一多の論を引用していることはよく知られており、この時期は、むしろ聞一多は古典研究者として認識されていたと言えよう。<sup>(9)</sup> 他方、新詩研究四本の内三本は早稲田大学の鈴木義昭氏一人によるものであることを考えると、この時期は詩人として認知されてはいても、作品分析など詳細な研究はまだ端緒にすぎたばかりだったと考えてよいだろう。

## 二、文革後一〇年の研究動向（一九七七〜一九八六）

文革終結以降一〇年の研究動向についてまとめると、作家別ベストテンは（一）魯迅六三三本、（二）茅盾九五本、（三）老舍八七本、（四）周作人四三本、（五）丁玲四二本、（六）郭沫若三〇本、（七）夏衍二九本、（八）蕭紅二八本、（九）蕭軍二五本、（九）竹内好二五本となっている。<sup>(10)</sup> この時期の現代文学研究は文革の影響が大きいといえる。ただ聞一多については九本と依然ベスト二〇の当確ラインにあり、文革を境として特に本数上は変化が見られない。内訳では、評伝一本、新詩八本、古典研究〇本、その他〇本と新詩研究が主になってきた。ただ作者別にみると、新詩の論文は、前述の鈴木氏三本と楠原俊代氏五本の二名のみ、評伝と合わせて三名の研究者しか聞一多の専論を書いている。つまり、全体の研究動向の変動とは無関係に細々と研究が行われていたことが窺われる。

### 三、九〇年代の研究動向（一九八九～一九九五）

九〇年代の七年間における研究動向について、作家別ベストテンでは、（一）魯迅二一六本、（二）周作人四五本、（三）沈從文三八本、（四）老舍三三本、（五）巴金三一本、（六）茅盾二八本、（七）郁達夫二六本、（八）王蒙一七本、（九）胡風一六本、（一〇）張愛玲一四本と、魯迅は別格として、ずいぶん研究動向に変動が見られるようになってきている。聞一多については、一二本とベストテン目前であり、本数こそこれまで変わらないものの相対的には聞一多研究は増加傾向にあったと言えるだろう。

事実内訳を見てもそこには変化の兆しははっきりと見てとれる。一二本中、評伝一本、新詩六本、古典研究五本、その他〇本となっているが<sup>(11)</sup>、うち新詩研究は五名の研究者が行っており、新規に聞一多研究を始めた研究者が現れたことが認められる。また聞一多の古典研究が改めて注目されてきたことが分かる。うちもつとも重要な研究は、一九八九年に刊行された中島みどり氏による聞一多の神話研究の訳注である『中国神話』である<sup>(12)</sup>。同書は日本の聞一多研究のみならず中国神話研究に多大な影響を与えた。

### 四、最新の研究動向

一九九六年以降現在までの約九年間の研究については、インターネットで公開されている論文目録データベースを利用し、不十分ではあるが阪口氏の論考を補うことにしたい。データベースで無償公開されているものとしては、一九七五年からの雑誌記事を収録した「雑誌記事索引データベース」（国立国会図書館）<sup>(13)</sup>があるが、今回は同データベースに大幅に書誌を増補した<sup>(14)</sup>有料データベース「MAGAZINEPLUS」（国立国会図書館機械振興協会経済文献研究

会・日外アソシエーツ<sup>(15)</sup>を使用した。これまでのベストテン圏内の作家別に同データベースで検索してみると、(一)魯迅三四〇本、(二)周作人五七本、(三)老舍五〇本、(四)巴金四二本、(五)郭沫若四一本、(六)郁達夫三八本、(七)聞一多三七本、(八)胡適三三本、(九)竹内好三一一本、(一〇)沈從文二二本となっており、九〇年代にはリンク外になっていた胡適や郭沫若が再び研究されるようになったり茅盾が不人気になったりと主要作家の出入りが見られるなか、聞一多については三七本と大幅に増加しており、聞一多研究の躍進が顕著であることは明らかといえる。

その内訳をみると、評伝八本、新詩二〇本、古典研究八本、その他四本となっており<sup>(16)</sup>、各分野まんべんなく研究がすすめられていることが分かる。こうした聞一多研究の広がりを可能にしたのは、一九九三年に全二巻の『聞一多全集』が、一九九四年に『聞一多年譜長編』が公刊され、研究のための基礎資料が完備されたことが大きな理由であろう。この二つの資料により聞一多の作品と事跡を容易に見ることができるようになり、日本の聞一多研究の発展を大いに促した。

まず、評伝・その他で専論をたてて顧みられるまでにはいたらなかった、聞一多の政治思想が論じられるようになった。文学研究の傾向としては、九〇年代以降政治的な主義主張からは距離をおきつつ、文学を文学として論じるようになってきている。では聞一多研究は時代を逆行しているのかといえは、そうではなく、九〇年代から盛んになってきた民国史研究の一環として聞一多を研究する傾向が出てきたことであろう。

新詩研究では、九〇年代から継続して着実な作品分析の成果が蓄積されつつある。新詩研究に関しては他の中国現代文学の研究動向と無関係に戦後から一貫して研究が積み重ねられてきており、そのこと自体聞一多の詩人としての価値の普遍性の証左ではないだろうか。

また聞一多の古典研究や神話研究に関しては、牧角悦子氏をはじめ当時の学術状況を踏まえつつ再評価を試みる研究が増え始めてきている。従来、民国期の作家を対象とした場合、中国古典文学の研究と中国現代文学の研究との間にはある種の断絶があった。例えば聞一多に即して言えば、現代文学を研究する立場からは、聞一多の新詩にのみ注意を向け、作品の背景となる作家を取り巻く環境に言及する際も、学者としての様相は迂回し、詩という枠組みでは同じであるはずの聞一多の詩経研究を論じることはなかった。<sup>(17)</sup> 他方、古典文学を研究する立場からは、聞一多の学術的な成果を研究史の延長として評価はするものの、現代の学問水準から見ての優劣を優先する傾向にあった。もちろん研究史として見れば正しい。しかし、聞一多においては彼の古典や神話の研究はとりもなおさず彼の文学精神の発露であった。そのように民国期文学史の一環として聞一多の研究を位置づける立場が、最近の聞一多の古典研究に関する諸論考の基本的なスタンスであると思われる。<sup>(18)</sup>

##### 五、日本聞一多学会

こうした最近の活発な聞一多研究の動向のうち、もっとも大きな動きが日本聞一多学会の設立であることは、手前みそで恐縮だが異論はないかと思われる。日本聞一多学会は、一九九九年に北京で開かれた聞一多生誕百周年記念学会に刺激されて、鈴木義昭氏、牧角悦子氏を中心に二〇〇〇年二月に設立された若い学会である。現在会員数は約八〇名、彼の幅広い才能の発露にならって、歴史・文学、古代・現代といったそれぞれの領域の中に留まるのではなく、そうしたものを広く統合した分野の研究を志す研究者が集まることを目指して運営されている。

会の活動としては、二〇〇〇年以降現在まで研究大会を八回開催し、毎回熱心な討論を交わしてきている。発表の

半数は古典研究に関するもので、他に聞一多と同時代の別の作家や当時の学術動向に関する発表などがある。近年の研究動向を反映したものといえよう。なお、研究大会を通じて醸成された研究成果の公刊の場として、二〇〇二年から年に一冊論文誌として会報を発行している。簡単ながら公式ホームページも製作し<sup>(19)</sup>、学会の活動報告や中国での研究動向<sup>(20)</sup>を公開するなど、日本の聞一多研究に資するべく活動を行っている。

政治経済分野に比較して文学分野の研究の地盤沈下現象が文革後に顕著となつていられると言われるが<sup>(21)</sup>、他方九〇年代のバブル経済崩壊以降、中国現代文学に限らず人文科学全体への圧力が高まっており、文学研究不要論をあちこちで聞くようになってきている。そうした逆風の中であるからこそ、日本聞一多学会のようなある程度専門に特化した学会を組織し、小規模なりの機動性を生かした学术交流の場を確保していく意義は大きいと考える。

以上、日本における聞一多研究の歴史と現状について概観してみた。今後の聞一多研究に裨益するところがあれば幸いである。

### 注

- (1) 実際のところは、そう簡単な話ではなく、研究者と研究対象の「距離」を考える必要がある。方法論懇話会編『GYRATV@』（第二号、特集「研究者と対象との距離」、二〇〇一年）の諸論考を参照。

- (2) 中国では学術研究全分野の論文データベース CNKI (<http://www.cnki.net/default.htm>) が運用され国内外を問わず誰でも利用でき論文の電子データをダウンロード購入できる。同データベースでは引用・被引用情報、梗概、そして一部では内容全文を検索できる。台湾ではオンライン複写サービスにとどまっているが、この有料サービ



- スも国内外から利用できる。
- (3) 一般に、研究者としての訓練を受けた時期一〇年ごとを一世代とし、戦後以降五〇年を第一世代（一九五〇年代）一九六〇年代、第二世代（一九六〇年代）一九七〇年代、第三世代（一九七〇年代）一九八〇年代、第四世代（一九八〇年代）一九九〇年代、第五世代（一九九〇年代）二〇〇〇年代と五つの世代に分けて研究の動向を論ずる。長期的にはそうしたすぐれた研究に後継者が現れることで、そのテーマに関する研究が量的にも増大するだろうから、長期的に論じる場合では統計的な傾向を読む方法が十分有効だと考えられる。
- (4) 阪口前掲論文参照。
- (5) 『洛神の賦——中国文学論文と随筆』（武蔵野書院、『目加田誠著作集』（龍溪書舎、一九八一年）再録、講談社学術文庫一九八九年再刊）所収。
- (6) 目加田誠『詩経』（日本評論社、一九四三年）。
- (7) 白川静『中国の神話』（中央公論社、一九七五年）。
- (8) こうした比較的初期の日本における聞一多の受容については、鈴木義昭「日本における聞一多」（早稲田大学日本語研究教育センター紀要九、一九九六年）、同「日本における聞一多『死水』の翻訳と解釈」（講座日本語教育三三、一九九八年）を参照されたい。
- (9) 阪口前掲論文参照。
- (10) 一九八八年発表の論文も含む。
- (11) 中島みどり訳注『中国神話』（平凡社東洋文庫、一九八九年）。「伏羲考」「龍鳳」「姜嫄履大人考」「高唐神女伝説の分析」「説魚」の諸論文を収録。
- (12)

- (13) <http://opac.ndl.go.jp/> より「雑誌記事索引の検索／申込み」を選択、二〇〇四年八月一七日現在。
- (14) 各種論文集（一九四五～）、学会年報・研究報告（一九四五～）、シンポジウム・講演集（一九四五～）、一般誌その他（一九八一～）を収録。
- (15) <http://web1.nichigai.co.jp/> 二〇〇四年八月一七日現在。
- (16) 牧角・横打前掲目録には MAGAZINEPLUS に漏れたものを含んだ四〇本の論文が記録されている。
- (17) 特に九〇年代以前の中国現代文学研究の立場からすると、古典は革命を阻害する悪しき伝統でしかなく、当時の知識人たちが古典を愛していたことに関しては相当程度目をつぶって議論していた。
- (18) 「伝統」を足がかりにした近代中国研究が行われるようにいたる経緯については、青木敦「中国史への内在的研究姿勢と外在的研究姿勢」、『論集～アジア学の最前線』 <http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/005.html> 二〇〇三年一月）を参照。こうした動向に対する文学研究からの応答については、鈴木将久「中国現代文学史はいかに『書き換え』られたか」、『論集～アジア学の最前線』 <http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/012.html> 二〇〇三年一二月）を参照。
- (19) <http://wenyiduo.hp.infoseek.co.jp/index.html> 二〇〇四年八月一七日現在。
- (20) 中国現代文化学会聞一多研究会の聞黎明氏より提供頂いたレポート「聞一多研究動態」を転載させていただいている。
- (21) 丸山前掲論文や阪口前掲論文参照。